あの日、あの時、あの夏は、まだ止まったままで・・・

雪野　椿姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの日、あの時、あの夏は、まだ止まったままで・・・

【Ｎコード】
Ｎ１５１０Ｓ

【作者名】
雪野　椿姫

【あらすじ】
俺には可愛い彼女がいる。
彼女は美しい。元気で明るく、人をまとめるようなリーダーみたいで、誰もが羨むような…
それで俺は、満たされていると思っていた。

でも何か忘れている気がする…
あれ？俺は…ボクは…
そんなとき、一人の少年に出会う。彼は「もうそろそろ四年前のこ

とを思い出してください」というのだ。

…俺って…一体…

第一話　俺って一体誰だっけ？（前書き）

『俺』視点

第一話　俺って一体誰だっけ？

「んっ…」

いきなりキスをしてくる彼女。
しかも、日本の中でとても大きな都市…東京の交差点のど真ん中で。
大胆すぎる…

「夏美？」

いつもは控えめな俺の彼女…
「ダメでしたか？」と澄んだ目で見つめてくる。
首を傾げる姿は、肩すれすれのところで切った真っ黒な髪を揺らし
彼女の美しさを引き立てる。
うっ…そんな目で見てきたら…

「あ、信号チカチカしてます！　早く渡ってしまいましょう！」

「え？あ…うん」

しっかりものだな〜…
たぶんこのまま俺が夏美の彼氏だったらずっと甘えっぱなしの頼り
っぱなしだろう…情けないなぁ…（はぁ

「あ、そうだ！甘いもの食べませんか？」

「お、いいね」

俺と彼女である石原夏美（いしはらなつみ）が付き合い始めたのは1年前。

まだ高校二年生だった頃。
俺らは、小学校の頃から一緒で、幼馴染として、クラスや学年でも結構有名だった。
漫画とか小説にありそうなベタな関係だけど…俺は悪くないと思う。
でも、十回程度告白されたことのある夏美と夏美にしか告白のされたことの無い俺は、どうしてだかつりあった。

「あ…あの…」

「ん？何？」

「カフェとかじゃなくて…コンビニじゃダメですか？」

「夏美がそうしたいなら別にそれでいいけど？」

俯きながら控えめに言う姿も…喜んで微笑む姿も…何もかもが俺にとっては愛しい。

「あ、でもちょっと遠いですね…また横断歩道渡らなきゃです…」

「時間なんていくらでもあるんだからいいだろ」

「そうですか？　いつも…」

その後は大きなトラックが通って聞こえなかった。
でも重要そうなことでもないから特に気にもしなかったけど…
“時間なんていくらでもある”そんなことを思っていたが…実際には止まったままで、時間なんて動いていなかったんだ…

「青になりましたよ？　渡らないんですか？」

「ごめん、考え事してた。」

優しく俺の手を引いて横断歩道を渡っていく…が

「おい！なにやってんだ！？危ないだろ！」

危うくトラックに轢かれるところだった…

…あれ？

前にもこんなことがあったような…懐かしい感覚…

「すみません」

とにかく謝って横断歩道を渡った。

そしてコンビニの前に着く。

何かがおかしい。

何がおかしい？

俺って誰だっけ？

だんだん自分が分からなくなる恐怖に手が震え始める…

「なぁ…夏美？」

「はい？」

「俺の名前ってなんだっけ？」

「なに言ってるんですか？“白石龍（しらいしりゅう）”じゃないですか？私は“リュウちゃん”って呼んでますけど」

「やっぱり…？」

「ふふっ…変なの」

だよな。

自分の名前を他人に聞くなんて笑われるだけだもんな…

何やってんだ俺。

…ん？

「あの男の子手を振ってますよ？お友達ですか？」

少年が手を振っている。

エメラルドグリーン色の髪をした十二歳くらいの少年なんて友達にいない。

「いや…知らん」

少年は駆け寄ってきて、ささやいた。

「四年前のこと…もうそろそろ思い出してください…“佐藤要（さとうかなめ）”さん」

「なに言ってるんだ？」

少年はニッと笑い、何とか背伸びをして俺と夏美の額に手を当てた。

すると夢の中にいるような気分に…

さっきまでうるさかった人ごみや、自動車のおとがまったく聞こえなくなった。

眠い…

第一話　俺って一体誰だっけ？（後書き）

また新しい作品を書かせていただきました。
前より上達していたらな…と思います。
ちら見してもらえるだけで私は嬉しいので…

第二話　四年前のこと（前書き）

要視点

第二話　四年前のこと

僕と龍と夏美。
幼馴染の三人。ある運命に引き寄せられ、中学校では同じクラスになることが出来た。

「俺と、夏美と要がそろうのは何年ぶりだ？」

「えっと…小学校三年生からだから…」

一生懸命年数を数える夏美…綺麗な指を一つ一つおってゆく…

「五年ぶり…ですかね？」

「懐かしいな～…三年のときは僕と龍でよく喧嘩してたもんね…それをいつも夏美が止めてくれてさ」

「今でもしてません？」

ギクッ
夏美の言うとおりで、僕と龍はよく喧嘩をする。
だってライバルだから…夏美を奪い合ってる感じ。
僕と龍は引きつった笑顔を見せるしかない…

「嘘ですよ、二人とも面白いですね」

ニッコリ微笑みながらも、危なっかしい…

でも…たぶん僕の負け。
もちろん幼馴染である僕たちは、周りから仲がいいと有名だが『恋』となると、また変わってくるのだ。
夏美と龍は幼馴染という噂があるから。
べつに龍に嫉妬とかはしていない。
それでもいいと思っているし、むしろ二人が付き合うことになったらあきらめて応援する覚悟がある。

夏休みに近づき始めたある日にいつもは三人で食べるはずの昼食だが、龍は用事があったので僕は夏美と二人きりになった。

「もう少しで夏休みだな～…そうだ！夏美の誕生日に遊園地とか、水族館とか行かない？」

「え？いいんですか？」

夏美は、『夏』に『美しい』と書く。
名前の由来は詳しく知らないが、夏生まれだから『夏』がつくらしい。
確かに『夏に生まれた美しい人』だと僕はいつも思う。

「もちろん、夏美もみんなで祝ってもらったほうが嬉しいだろ？」

「はい！」

まぶしいような笑顔で頷く夏美…可愛すぎて見とれてしまう。

「詳しくはまた今度決めようか」

「賛成です…要君はいつも優しいですね」

「夏美のほうが優しいよ」

ニコニコしながら微笑む彼女の髪は、夏服のシャツの白さを引き立たせる。

僕は夏美の弁当箱から卵焼きを1つもらって口に入れた。

「あ！つまみ食いはいけませんよ」

「夏美は料理が上手いな」

「もう…お世辞ばかり言って…ほしいならほしいって言ってくださいね？」

僕の叱っておきながらも、笑っている。

その優しさが心を和ませてくれる。

「はい」

え？

“あ～ん”ですか？

いやいや…そんなベタな～

嬉しいけどさ…嬉しいけどもさ…いいんですか？食べちゃって？

「なんだ…いらないんですね…やっぱおいしいって言うのも嘘…」

そんなシュンとした顔をしないでくれ…

食べなきゃいけないような雰囲気にするのは…

「おいしいよ？　ほんとに、嘘なんかじゃない！」

「じゃぁ何で食べてくれないんですか？」

「食べていいのかな？って…」

今まで大人っぽかった性格とは逆に、ムスッとした表情をし、子供っぽく頬を膨らませる。
それはそれで可愛い…今までとのギャップともあわせて。

「食べていいに決まってるじゃ無いですか…」

そう言いつつも箸でたこさんウィンナーを掴み、また僕の目の前に見せる。
ペットですか？僕は…

「はい、どうぞ」

ニッコリ微笑む。
食べなきゃダメだねこれ…夏美の機嫌を損ねるとこの先結構…クラスも一緒だし…下校も一緒だし…
って、“あ～ん”じゃなきゃダメなんですか？

「しょうがないなぁ……」

心の中じゃ嬉しいんだけどね、このまますぐに「ぱくっ」って食べちゃったらなんか申し訳ないじゃん？
龍に…いくらライバルとはいえこんな裏で…

…こんなことを心で思いながらも僕は、「ぱくっ」と食べました。

「…おいしい」

ニッコリ微笑むとちょっと頬を赤く染めた夏美は、微笑み返してくれた。

第三話　決断（前書き）

夏美視点

第三話　決断

「ねぇ？　佐藤君に“あ～ん”したって本当？」

「！？」

休み時間にいきなり優菜（ゆうな）にそんなことを聞かれて、飲んでいた水が器官に入ってしまう。

優菜は、西野優菜（にしのゆうな）という名前で、私は小学校五年生くらいから仲良くさせてもらっている親友。

しばらく咳き込んでいると、優菜はニタッと笑い

「白石君じゃなくて佐藤君を選んだんだ～」

「違うよ～要君が私のお弁当をつまみ食いするから…」

私は選択を迫られている…らしい。

クラスの女子はみんな『佐藤君と白石君、どっちを選ぶの？』と聞いてくる。

選ぶつもりなんて無いのに…今のまま、三人で仲良くしていけるだけで私はいい。

彼氏なんてほしいと思わない。

ずっと…ずっと…このままで…

「つまみ食いさせておけばよかったのにさ、何でわざわざ“あ～ん”してあげたの？」

「え？　だって…要君って弟みたいじゃない？」

「いやいや…それは夏美が面倒見すぎなだけだよ？」

「そうかな…」

私から見て要君は、弟感覚。リュウちゃんは、お兄ちゃん感覚。

「来年から受験生になるわけだし…恋がどうとか言ってられなくなるよ？　今のうちに二人のどっちを選ぶか決めておくことね」

「何で？　二人から強制的に彼氏選ばなきゃいけないの？」

「強制ってワケじゃないけど…彼氏を選ぶなら、あの二人から選んだほうがいいと思うけど？」

「ふ～ん…」

そんな感じで話は終わったけど…
選ばなきゃダメなのかな？

午前中の授業はそのことが頭で一杯のまま終わり、昼休みになった。
今日は、三人。
だからたぶん…私の誕生日の話してくれるかな？
そんな期待を胸に、屋上へ行った。

先に屋上にいた二人は、楽しそうに何か話していた。

最近私は悩んでいることがある。
二人とも男の子だから、女の子の私のことを置いて行っちゃう気がしてきて…

どうしたらいいか分からない。

「お、夏美遅かったじゃん」

そういいながらリュウちゃんは、私の肩に手をかける。

「ほら、行こ？」と私を連れて行く。

私…まだ二人と一緒に仲良くやっていけるかな？

第四話　伝えたい気持ち（前書き）

龍視点

第四話　伝えたい気持ち

「夏美？」

今日の夏美の表情は、なんか悲しそうに見えた。
いつも自分の気持ちや、辛かったことを自分ひとり、細い体で背負ってしまう。
だからこそ俺たちがちょっとでも夏美が夏美らしくいられるような環境を作ってあげなきゃいけない。

「…はい？」

いつもの笑顔で返事をしてくれる。
でも…俺には何が出来るかわかんない…
それが最近の俺の悩み。

「なんでもないよ、要も待ってっから」

夏美の手を引いて、連れて行って三人でお昼を食べ始めた。

「夏美さ、水族館と動物園…どっちがい？」

「う～ん…水族館かな？アザラシとか…イルカとか見たい！」

ニコニコしているけど…俺は心配で仕方ない。

「い…いひゃい…！もう…リュウちゃん？」

半ふざけで夏美の頬を抓ってみた。

夏美を癒してあげたいのに…俺はこれしか出来ない…

「離してよ〜！！」

「龍どうしたの？いきなり夏美を抓ったりなんかして…夏美がかわいそうだよ？」

「なんかさぁ…夏美が寂しそうな顔してたからさ」

手足をじたばたしながら暴れ始めたので、離してあげることにしました。（笑

「うぅ…まだ痛い…」

「大丈夫？」

要は優しく夏美の頬に触れる。
自分に素直でいられる要がうらやましい…
夏美に優しくしてあげようと頭では、気持ちでは思っているはずなのに、どうしても手は違うことをしてしまう。

「…ごめん」

頭をなでると、ちょっと潤んだ目で「もうやらないでくださいね」といいながら夏美は撫で受けてくれた。
今…俺は素直に夏美に触れることが出来ているだろうか？
…神様…俺と要を入れ替えることは出来ますか？

結局、水族館へ行くことに決まり、夏休みに待ち合わせをして、電車で行くことになった。

夏…その季節は俺たちの関係を大きく変える季節となった。

第五話　夏の横断歩道（前書き）

要視点

第五話　夏の横断歩道

暑い…
夏は何をしても暑い…
やる気をなくしてしまう。
団扇と扇風機で、涼しさを保っているけれども…エアコンは使用禁止。
親にリモコンを取り上げられまして…椅子に乗れば届くのだけれどそんなことするくらいなら、扇風機で『あ〝あ〝〜』とかやってるほうがいい。
そのままダラダラと寝転がっていると、ふとカレンダーが目に入った。
明日の日にちに赤い丸がついている…っていっても僕が書いた。
夏美と龍と水族館に行く日でもあり、夏美の誕生日でもある。

「あ、プレゼント考えてなかった。」

夏美が喜ぶようなもの…何にしようかな…？
そのまま僕は寝転んだまま悩んだ。
夏美はショートだからヘアゴムとかあまり使わなそうだし…

「ちょっと〜…要？」

姉ちゃんがいきなり部屋に入ってくる。
ちなみに僕の姉は高一。名前は唯美（ゆみ）

「なに？」

「お風呂洗っておいてっていったじゃん！　何で洗ってないの？」

「あ…忘れてた。」

まずい…姉ちゃんだんだん顔が引きつってます…
弟をいじめないで？
怖いよぉ～…（泣

「もう…今日はしょうがないから許してあげる。そのかわり…」

「そのかわり？」

「アイスおごって」

うっ…
ニコニコしているがココでノーと言えば命が危うい。
こんなに暑いのに…行っても熱中症で命が危うい。
どちらを選ぼうか…

「いやなのかな？要君？」

「いいえ…喜んで行ってきます」

「そう来なくっちゃ！」

と、言うことでこんな猛暑の中僕は自転車をこいでいます。
どっちにしても夏美のプレゼントを買わなきゃいけないので外にでることにはなっただろうけど。

「はぁ…めんどくさい…。」

近くのコンビニでも片道自転車で１０分程度かかる。
東京という結構都会な地域でもこういうことがあるんだ。

そのままぼーっとしていると、コンビニの近くまで来た。
後は横断歩道を渡るだけ、という所まで来た。
まだ信号が赤だったので待っていると青になった。

小学生は右左きちんと見るんだろうけど…
僕はたまたまその日だけ、右左を見なかった。

トラックがやってきていたのも知らずに…

第六話　いつまでも、三人で（前書き）

夏美視点

第六話　いつまでも、三人で

要君が事故にあった。
その言葉を聴いて、私はスグに駆けつけた。
病院につくと、先に要君の家族とリュウちゃんがいた。

「夏美ちゃんごめんなさいね、要が事故にあったせいでわざわざ来てもらっちゃって…」

「いえいえ、私のほうこそ小さい頃から仲良くしてもらってますから」

「なっちゃん…どうしよう……どうしよう…要が…」

そういって唯美さんは私に抱きついてきた。
泣いてはいないようだけど…目が潤んでいた。

「夏美…」

「リュウちゃん、要君…大丈夫だよね？」

「…意識不明……」

リュウちゃんはそれだけつぶやいた。

「私の…私の…せいなの……私がいけないの……乗ってた自転車もぐしゃぐしゃだったし…」

「こら、唯美、そうやって自分だけを責めるんじゃない」

唯美さんは、いきなり唯美さんのお父さんに怒られたのでびっくりして私から離れた。
要君は集中治療室で眠ったまま…
病院には静まり返り、緊張感のある空気が流れていた。

私は夢を見た。
今いる場所とはまったく違う病院で、普通の病室だった。
窓際で、昼ごろの暖かな光が降り注いでいた。

「…要君…？」

名前を呼んでも要君は眠ったままだった。

「要君…要く…」

何度も、何度も何度も…名前を呼んだ。けれどもおきてくれなかった。
そう思った瞬間晴れた空は急に曇り、雨が降り始めた。
病院には廊下だけ電気がつき、怪しい雰囲気になっていた。
カツカツ…
誰か歩いてくる。
いつの間にか外では雷も鳴っていた。
そして歩いてきた人はそんなに背は高くなく、私のほうを向いてニヤッと笑った。

「夏美、起きろ。」

「はっ！？」

リュウちゃんの声で目が覚めた。
私は周りをキョロキョロ見渡すと、集中治療室の前の椅子に座っていた。
夢で見た普通の病室ではなく、廊下だった。
雰囲気は、夜だったため、夢の中とちょっと似ていたけれど、誰も歩いてくる様子は無かった。

「どうした？怖い夢でも見た？」

「え？」

「だって泣いてたから…」

「うそ！？」

急いで目を拭うと濡れていた。

「うなされては無かったけど…」

「怖かった…要君が何度名前を呼んでも眠ったままで…」

「きっと急にこんなことが起きたから夢にでてきたんだろ」

「リュウちゃん…私怖い…要君がもう目を覚まさないんじゃないかって……唯美さんだって自転車がぐしゃぐしゃだったって言ってた

し…夢にだって出てきたし…」

「大丈夫、俺たちいつだって三人でがんばってきたじゃん…今までそうだったんだからこれからもそう…きっと大丈夫」

そういってリュウちゃんは私を抱きしめてくれた。
とても安心したから、涙が溢れた。
いつまでも…いつまでも…三人で…

次の日、私はそのままリュウちゃんの腕の中で寝てしまった。
ずいぶんとさわがしく、目が覚めた。
リュウちゃんもぐっすり眠ってしまったらしく、今度は私がリュウちゃんを起こしてあげた。

「リュウちゃん？…朝だよ…？」

「んっ？　おはよう…要は？」

「え？」

「…だから騒がしいのか…」

そして私は気づいた。
要君が、もう何度名前を呼んでも起きてはくれないということを…

第七話　ここから二人で（前書き）

龍視点

第七話　ここから二人で

「ねぇ…夢だよね？　リュウちゃん！！…リュウちゃん……」

「夢じゃない。現実だ。」

「嫌……いやぁぁ…」

いつもは大声で泣いたりなんかしない夏美が泣き出してしまった。
幼馴染の死によって。
いつまでも…いつまでも…続くと思ってた俺たち…
だが夏休みのある日、時は止まった。

「なっちゃん…」

唯美さんが涙ながらに夏美を慰めていた。

「……っ…」

なんか俺も涙出てきた。
そのまましばらく泣いていると昔のことを思い出した。

『ねぇ君、白石君って言うんだよね？』

『そうだけど？』

『僕は出席番号が１つ前の、佐藤要って言うんだ、よろしくね！』

無愛想で素直じゃない俺に最初に話しかけてくれたのは要だった。
小学校三年生のときまでずっと俺は一人ぼっちだった。
そんな俺を変えてくれたのは要だった。
ライバルだと思っていたのに…
勝ちでも負けでも引き分けでもなんでもない終わり方をしてしまった。

しばらくして、要のお葬式終わって少し経った日。
もう要はこの世にはいない。
ただの思い出になってしまった。
そんなことを考えていた。
新学期も始まり、みんな要のことは忘れてしまったような…
その日の昼は、夏美と食べることにした。

「……私の誕生日が…まさか要君の命日になるなんて思っても無かった…」

「…そっか…」

「…ごめんなさい。また悲しい話をしてしまって…」

「いいんじゃない？時々は…みんな誰も、要の話なんてしないから

さ、俺らだけでも…」

「そうですね…」

夏美は俯いたまま、また話し始めた。

「ずっと三人でいれると思ったのに…二人きりになってしまいましたね…」

「うん…」

しんみりした空気の中お弁当を食べ続けた。

「いつも私のお弁当を『おいしい』って言ってつまみ食いしてた要君の笑顔…懐かしいです…」

「そんなおばさんくさい事言わないの」

ふっと笑ってそんなことを言うと

「お、おばさん？リュウちゃんったらひどい…」

「うっ…ごめんなさい…」

いくら夏美を怒らせても夏美には勝てない…

うぅ怖いよ…可愛い笑顔を振りまく少女かと思えば…

夏美ってもしかして裏表激しいの？

そんなことも本人には言えず、二人になってしまった二学期を過ごすことになった。

第八話　冬の寒さ（前書き）

龍視点

第八話　冬の寒さ

「寒い…」

「寒いに決まってるじゃないですか？　雪降ってるんですから」

「そんなきっぱり言われても…」

二学期も終わりに近づいた十二月。
最近は夏美と二人で登校している。

「冬ってどうしても元気出ません…」

「夏生まれだからか？」

「関係なくないですか？」

こういうくだらない話ばっかりしているうちに、時間は早く過ぎていってしまう。
一人では長く感じる道のりも、ほかの人がいると早く感じるな。

「はぁ…もうちょっとでクリスマスですね」

寒そうに手をこすって暖めている夏美は、急にそんなことを言い出した。
手袋してますけど寒いのでしょうか彼女は…

「そうだな～…ホワイトクリスマスとかにならないかな～」

「そんなメルヘンなこと起こると私は思えませんね」

「ったく冷たいな、夏美は」

「ひゃ！？　冷たいですよぉ」

わざとひんやりした手で夏美の頬に触れてみる。
びっくりさせるのが結構面白い（笑

「これが夏美の冷たさ」

「そんなに冷たくないです」

本当にくだらない。
くだらない話→真剣な最近の世間話→ちょっかいをだす→くだらない話
これが登校中などのお決まりパターン

最近の夏美の表情は、少し寂しそうに見える。
話していると笑顔を絶やさないとても明るい女の子なのに、話が終わって静かな空気が流れると寂しそうな顔つきになっている気がする。
追求しないほうがいいのかな？とか最初のほうは思ってたんだけど、心配になってきた。

「最近、夏美寂しそうだな」

「そういう風に見えますか？」

俺は空から降ってくる雪を見上げながら

夏美は自分の足元を見つめながら
「なんか…無理してないか？」
「……無理してないというと嘘になります」
「もし大変だったら俺に頼っていいからな」
「はい…ありがとうございます」
ちらっと夏美を見たら、自分の足元をずっと見つめていたが、いきなり俺のほうへ向き直った。
「あの……――」
「ん？」
「きょ…今日の昼休み…一緒にお弁当食べませんか？　その時…リュウちゃんに頼ります。」
「分かった。じゃぁ今は頼らないで強い夏見でいてくれ」
「はい」
夏美はニッコリ微笑んだ。
その後もくだらない話は続き…
「パンダの尻尾って、黒ですか？白ですか？」
「しらん、俺に聞かないで動物園に行くんだな」

「まったく…冷たいなぁリュウちゃんは」
そういって冷えた手で俺の頬に触れてくる。
マジでびっくりするんですけど…この冷たさ……手に血が通っていないような…
「冷た！？」
「さっきの仕返し。と、リュウちゃんの冷たさです。」
やられた…
さっきまで『頼っていいですか？』という感じの少女がこんなに変化するものなのですか？
夏美は強いなぁ…俺なんかよりも…

「ごめんなさい…またリュウちゃんに甘えなきゃダメなんですね…私は……」
「たまには甘えることも必要なんじゃない？　で、話って何なの？」
夏美の隣に座ると、夏美は寂しそうな顔つきになり、俯きながら言った。
「…私……引っ越すことになったんです…」

「ふ〜ん…ってえ!?」

第九話　まさかの告白（前書き）

龍視点

第九話　まさかの告白

「…私……引っ越すことになったんです…」

「ふ～ん…ってえ！？」

窓の外では雪が舞い散るとてもロマンチックな風景の中、俺は夏美の寂しそうな顔つきの理由を知る。
慌てて落としそうになった弁当をなんとか自分のひざの上にのせる。

「で、それってどういうこと？」

「…お父さんとね、お母さんが離婚することになっちゃって…名前はそのままで大丈夫なんだけど…引っ越すことになったの…」

「遠いのか？」

「ううん、電車だと…二駅のって一回乗り換えたらスグの所」

「じゃぁいつでも会えるな、気にすることは無い」

「でも…三学期はほかの中学校に通うことになって…」

「夏美ならどこでもやってける、俺が保障してやる」

「リュウちゃんはいつも明るいですね、うらやましいです」

夏美は、ニッコリ微笑むと

「おなかもすいたし、食べましょうか」

「そうだな」

引越しの件はこれで一件落着。俺も思わず笑顔になる。
俺も夏美がうらやましい…なんか近くにいるだけで癒されるし。

「お～二人さ～ん♪　私も一緒にいい？」

「優菜！？　べっ…別にいいけど……」

「あら？　邪魔しちゃいけなかった？」

「邪魔？なにそれ？西野も一緒に食えばいいじゃん」

邪魔？何のことでしょうか？俺にはまったくわからないんですけど…！？
女子によく言われちゃう“鈍感”とか言うのに関係があるのだろうか？

「全く…白石君は鈍感ね」

無表情でそんなことを言われると本当に傷つくんですけど？
鈍感なのは認めるけど何に対して鈍感なんだ俺は…！？

「悪かったな、鈍感で」

「うん、悪い」

「まぁまぁ、時間なくなっちゃいますから早く食べちゃいましょう」
そういう楽しい時間も、早く過ぎて行ってしまう…
時間…限りある時間を無駄なく使って行きたい…

「お昼は楽しかったですね！　優奈も来てくれたし…」
ニコニコしながら無邪気に話す姿はまるで子供だ。
いつもは清楚で優しげだがこういうギャップも可愛い。
でもロリ主義は無いです。本当に。

「鈍感って言われたがな」
わざと不機嫌そうにしてみる。
「どっ…鈍感…なんかじゃないですよ？」
ちょっと頬が赤くなっているように見えるのは気のせいだろうか？
「そうか？」
「もう…そんな話やめ……ませんか？」
「嫌なのか？」
「嫌じゃないですけど……もうっ…さっきの取り消しです、やっぱりリュウちゃんは鈍感です」

「はい？」

やっぱり俺は鈍感なのか…

何がダメなのかが分からない…ってそれが鈍感なのか？

もう何がなんだか分からなくなってきた。

鈍感ってそもそもなんだっけ？

第十話　別れのとき（前書き）

夏美視点

第十話　別れのとき

今日は終業式。
この中学校の制服を着るのも、登校するのも最後になってしまう。
卒業式まで学校に通いたかった…
お母さんはもう昨日から引越し先に行ってしまっているため、私は終業式が終わった後、一人で引越し先へ行くことになる。

「いってきます…」

今日から引っ越してしまうと思うと、お父さんとも気まずい雰囲気になる。
お父さんは何も言わなかった。

外へでると。門の前でリュウちゃんが待っていてくれた。

「あ、おはようございます」

「ん？おはよう」

リュウちゃんの笑顔を毎朝見れるのもこれで最後。
こういう状況だと、悲しい雰囲気にしてはいけないなぁ…
今まで私は、とても幸せな生活をしていたんだな…って思う。

「今日で夏美と登校できるのも最後だな」

悲しそうな表情を一切見せず、リュウちゃんは話し始めた。

「最後とか言わないで下さい……悲しくなってしまいます…いつも

みたいにニコニコしたリュウちゃんがいいです…」

「あ…ごめん……」

「最後までわがまま言ったり、甘えたりしてごめんなさい…たぶん私は引っ越してからもリュウちゃんに甘えっぱなしだと思います…邪魔ですよね…？」

「全然邪魔なんかじゃない。幼馴染なんだからいくらだって甘えていいんだからな」

リュウちゃんはニコニコしながらも真剣な顔つきで私の頭をなでてくれた。

けれど私はその手を振り払ってしまった。

本当の気持ちはいつまでも甘えていたい…リュウちゃんのそばにいたいって思うのに、もう一つの私の体の中にある気持ちは違う。いつまでも甘えていたらこの先引っ越してから、新しい中学校で楽しい生活が送れるだろうか？高校生なっても一人でがんばって行けるか…

その気持ちが本当の気持ちをつぶしてしまって、私は自分の気持ちに嘘をついている“うそつき”なんだ。

「…甘えちゃいけないんです…今甘えたら、ほかの学校行ったら私…一人なんですよ？一人で何もかもこなさなきゃいけない…ほかの人に頼ってばっかりじゃいけない…」

「もちろん一人でがんばらなくちゃいけないこともある。でも疲れたら新しい学校で友達だって出来るだろうからその人に頼ったっていい。それでもがんばれないなって思ったらそんなに遠くないんだ

から俺に頼ったりしてもいい」

「…いま……今、頼っていいんですか？」

「今頼らなかったら頼り方を思えなかったら逆に疲れすぎて楽しくなくなっちゃう」

「ありがとう」

「もう悲しい話は、おしまい。あ、それとパンダの尻尾って普通は白なんだって、たまに黒いのもいるらしいけど…」

リュウちゃんは優しい。
私がくじけたときは支えてくれる。悲しいとき、相談に乗ってくれて悲しさを半分にしてくれる。楽しいとき、いつも私に話してくれて楽しさだって私に分けてくれる。
ずっとそばにいたい…リュウちゃんの隣を…離れたくない。

「そうなんですか？わざわざ調べてくれたんですね！」

「なんか黒のような気がしてたんだけど、白だから絵を描くときは気をつけろ」

「はい、分かりました」

終業式も終わって下校していた。

「今日、荷物はもうむこうにあるので、電車で引越し先に向かいます」

「ふ～ん…駅まで送っていこうか？」

「あ、大丈夫ですよ？　リュウちゃんはリュウちゃんで用事があると思いますし」

「用事無いから送ってくよ」

「そうですか？ありがとうございます」

通学路とは違う道を歩いていく。
もう葉が落ちてしまった木には、霜がまだうっすら残っていて太陽の光を受けキラキラ輝いていた。
二人とも気まずい雰囲気ではなかったけれど、ただ黙って歩いた。

「わざわざ送ってくれてありがとうございます。ではまた会える日まで…」

「うん」

そう言ってリュウちゃんは私のおでこにキスをした。

「ひゃっ！？」

「じゃぁね」

それ以外何も言わず去っていってしまった。

神様…お願いします。

またいつか…いくら時間が経ってもいい。
けれどリュウちゃんの隣にいさせてください…

第十話　別れのとき（後書き）

次の話はまた数年後に飛びます。

第十一話　恋の実（前書き）

夏美視点

第十一話　恋の実

春…
ぽかぽかして暖かくて心がとても和む…
幸せ…
私はつい先週に高校生になりました。
引っ越してからも何とか楽しく中学校生活を送ることが出来ました。
きっとリュウちゃんのおかげだな…
リュウちゃんとは、明後日の日曜日に会う約束をしていて、このままデートにならないかな～？とかちょっと思ってます。
別れて新しい環境で過ごしているとき、ふと気がついた。
私の心の中に、“恋”というものが芽生えていたということに…。
けど優奈にも、お母さんにも誰にも言わない…この七年間という長い長い初恋を、綺麗なまま心の中に残しておきたいから…

「また外見てるの？夏生まれのくせに春好きよね～…」

高校に行っても優奈は一緒だった。
昔はポニーテールをしてたんだけど最近は、結ばずにおろしているので大人っぽく見えます。

「だって暖かくて…」

「やっぱり夏生まれなだけ寒いのよりは暖かいほうが好きなのね。
でさぁ…話変わるけどさ…もう少しで佐藤君の命日ね…」

「うん…お墓参り…リュウちゃんとか、唯美さんと行こうと思ってるの」

『悲しい顔をしてはいけない。いつも笑顔で。悲しい顔をしたいときは誰かに頼れ』

そんなこともリュウちゃんに言われていたので私はもう要君の話しをされるのは慣れっこ。
悲しくないことはないし、時々夢に出てきたりして泣いちゃうこともあるけど、涙はあまり見せたくない。
そんな強がりが自分の心を苦しめていたのかもしれない。

「ふ〜ん…で、白石君とは最近どうなの？」

「なっ！？…明後日…会う約束を……して…ます。」

「なに驚いてるの？　顔が赤くなってますよ？石原さん？…あ、でもそのうち“白石さん”になるんだっけ？」

「…なりません」

「じゃぁ白石君が“石原君”になるのかな？」

「っ…もう…優菜ったら…」

そんな結婚するなんて考えていません。
どこまで話を飛ばすつもりですか？
付き合ってたらまだ分かりますけど…

「あのさぁ、もう学年全員の名前覚えた？」

「全然ダメです…人数が多すぎて…」

私たちの通っている高校は、とても人数が多く、一学年二百人弱という人数。
全員の名前を覚えるどころか、まだ全員の顔も見てません。
はぁ…高校生活楽しくなるといいのですが…

「あ、そうだ、今日は学年全体で交流プログラムがあるらしいから、それで覚えたら？」

「それはいいんですけど…大丈夫でしょうか？」

「大丈夫よ？きっと“白石”夏美さんなら」

「ちょっと？その“”の間のものは認めませんからね！？」

『ということで、今からA組の実行委員がくじを引くので、その番号の人はグループになってください。そのグループで一学期のテストまでの期間、勉強してもらいます。最後にテストを受けて一人でも赤点を取った人がいたら、一日プリントを百枚やってもらいます。』

こんなのマイク通さなくても聞こえると思いますけど…
それになんて小学生っぽい課題なのでしょう…
これは交流プログラムとは言えないです。

「夏美何番だった？」

「７２３」

「え？　なつみ　じゃん！？」

「嘘ですよ、二百人弱なんだから七百も無いでしょ？　１７８です」

「もう、エイプリルフールは過ぎましたよ、私は…６７」

「一緒だといいね」

そんな風に話しているうちに、二十四グループのうち、七つ目のグループの順番になった。

『え～と…次は七つ目のグループ…６７、１７８――……』

「「やった～」」

思わず手を合わせて喜んでしまう。

『最後の一人…あれ？手が抜けない…』

よくあります。手の親指の４？したくらいのところが抜けなくなるんです。

『９５番…』

その後もグループ抽選が行われ、放課後はみんなそのグループで集まってこれからのスケジュール調整を行っていた。

私たちのグループも全員集まって、まず自己紹介をしていた。

1グループ平均十人のグループなんだけど…

1，2――…

あれ？一人足りない？

「はぁ…やっとついた…遅れてすみません」

軽く息切れをしながらやって来たのは、一人の男子生徒だった。

しばらくひざに手をついて呼吸を整えていたのだが、彼がぱっと顔を上げた瞬間、私は心臓が止まりそうになった。

第十二話　夕日坂（前書き）

夏美視点

第十二話　夕日坂

心臓が止まりそうなほど驚いた。
私は三年前、好きな人と別れた。
それは辛くも私を大きく成長させてくれた。
その別れた相手にそっくりな人に…
出会ってしまったからだった。

『下校時刻です。校舎内にいる皆さんは――』

「もう下校の時間になってしまったので、自己紹介はまた明日。」

C組の、義樹君がきっぱりと夕焼けに照らされ輝く銀縁のメガネをくいっとずれを直しながら言うと、教室から出て行ってしまった。
きっとすごくまじめでお堅い人なのでしょう。

「じゃぁ解散しますね。また明日…」

E組の咲良ちゃん&楚良ちゃんの双子の二人は上品にお辞儀をするとさっさと帰ってしまった。

「ちょっと義樹？待ってよぉ～」

義樹くんのことがすきではないと思われる幼馴染でC組の真琴ちゃんも義樹くんを追いかけ出て行ってしまった。

「もうっなんなのよ！？意味分からないですわ！？」

自己中心的お嬢様な、B組の梅ちゃんも可愛いツインテールを揺ら

せながらぷんぷんした感じで出て行った。

「ったく…なんで俺がこんなやつらと勉強しなきゃいけねーんだよ…明日来ねーから義樹に言っとけ」

自己中心的俺様S系な（あれ？さっきとかぶってない？）D組の涼（りょう）くんも出て行ってしまった。

「あ、う～んと…僕も帰らせていただいきます」

堅くなさそうなまじめ男子、F組の隼（しゅん）君も出て行った。

メンバー十人中、七人は帰ってしまい、私と優菜とリュウちゃん（仮）が教室に残った。

「なんだよどいつもこいつも…はぁ…」

彼はめんどくさそうに教室からでようとしていた。

私は最初、呼び止める気はなかった。もし、この人がリュウちゃんじゃなくて人違いだったらすごく嫌だったから。

けれど優菜が私のことをひじでつんつんしてきたので、彼を呼び止めることにした。

「リュウちゃん！？　リュウちゃんだよね！？」

「ん？　あ、お前らいたのか」

気づかなかったの？

この鈍感度はリュウちゃん以外の誰でもない。

「あ、夏美！　と、西野か。」

「何で夏美の時は嬉しそうなのに、私のときだけその反応！？」

「別に西野に会えても嬉しくないし。」

相変わらず二人はこんな感じ。

どちらが悪いというわけでもなく言い争い。

「喧嘩するほど仲がいい」ってこのことなのかな？

とか思わされてクスッと笑ってしまう。

「明後日会おうって言ってたのにまさか同じ高校だと思わなかった」

「私も…すごく嬉しい」

ずっと会えなかったわけでもなく、一週間に一回位会っていたのに

嬉しすぎて涙でそうです。

「はいはい、二人とも悪いけれども、甘～い時間はちょっとお預け、

下校時間が過ぎていますのでラブラブタイムは後で」

「ラブラブなんてしてません！」

リュウちゃんは鈍感すぎてきょとんとした感じ。

いつかは伝えなきゃいけないこの想い…

度胸の無い私は、胸の中の綺麗な箱にその思いをいれて鍵をかけて…

誰にもばれないように、心の隅に隠してしまっている。
リュウちゃんが鈍感でよかったような…悪かったような…
スグにこの気持ちがばれてしまったら、恥ずかしくてまともに接していられなくなっちゃうし、鈍感すぎては、想いが伝わらない…
いつまで私は迷えばいいんだろう…

「ちょっと！？夏美危ないわよ？信号赤！」

「はぅっ！？」

優菜が私の手を掴んで引き止めてくれたうえに車が通っていなかったので交通事故にあいませんでした。

「ごめん…考え事してた」

「もう…夏美ったら…　白石君、私ここの横断歩道渡ったら夏美と別れるから、夏美と手をつないで帰ってくれない！？　危ないから。」

「むが…っ！？」

反論しようと思っていたのですが、それより先に優菜の手が私の口を抑えていました。
うぅ…ここで反論しないと…心のふたが開いて、想いが溢れだしてしまいます…

「ん？別にいいけど？」

「んっ…リュウちゃん…？」

やっと優菜が手を離してくれて、横断歩道を渡りきると、

「じゃぁね　また明日！」

「じゃぁね～」

優奈と別れて駅までの道のりは、リュウちゃんと二人きりになった。
夕日がだんだん傾き始めて、東の空はもう暗くなり始めていた。
二人の影はとても長く、永遠に続くのではないかというほど…
この坂を上ると駅に着く。明日だって会えるのに、『一緒にいたい』
という思いが、駅に近くなればなるほど大きくなっていく。
歩幅の大きいリュウちゃんに合わせて時々小走りになりながら黙って坂を半分登った。

「夏美…」

「はい？」

ずっと私とリュウちゃんの足元だけ見て歩いていた私は顔を上げた。
するとリュウちゃんがそれ以外言わず、視線を私に見せず、手を差し出した。
私は、私よりもちょっと大きいリュウちゃんの暖かい手を握り締めた。
胸の奥がツンと締め付けられる感覚がした。

第十三話　悪魔《前編》（前書き）

龍視点

第十三話　悪魔《前編》

俺はある日、「奇跡」というものが起きた。
三年前に幼馴染が引っ越して、一週間に一回会えるか会えないか。
ずっとその日常が続くと思っていた。
けれど昨日、同じ学校に通っていたことに気づいた。
今度こそ彼女に、“大好き”って伝えたい……

「白石君。そこは違うと思うのですが？」

「ココか？　…違くない。」

夏美と同じグループなのは…
う…嬉しいけども（照
何でコイツがいるんだ？

「う～んとね…僕は義樹君が正しいと思うな～…」

「さすが義樹～♪」

隼も真琴さんもうるさい。
静かにしていてほしい…やり直してほしいのならその人に集中できるような空間を与えるべきだ。
それにココは図書室だ、柱や壁のいたるところに『図書室では静かに』というポスターが張ってある静かでなくてはいけない場所で、勉強を間違えたヤツを攻める場所ではない。

「あ、涼君そこは違いますよ？」

「あ？ここか？…ったくなんでグループで勉強なんか…」

「こんなの私だっていやよ？黙ってやりなさい」

あそこにも俺と同じような状況な人が…
二人に叱られつつも何気にがんばる…
ていうか西野と夏美は仲がいいな。一緒にいない所を見たことが無い。

「何で私なんかが庶民と…」

「庶民と言う言い方は失礼ですわよ？　いくら私たちと身分が違うからといって…」

（わがままな）梅さんのフォローにまわっているみたいだけど…双子ちゃんの咲良さんと楚良さんも人のこと言えませんけど！？
このくじ引きはなんて公平なんだ…バカから頭のいいヤツ。庶民…なのか？とお嬢様とかキャラの濃い人薄い人…

「あぁ…もう俺疲れた」

「ダメです。まだ終わっていません。この問題集は…あと２０ページやってもらいます」

そのめがねをくいっとするのうざいんですけど？
やめてくれません？
て、言うか俺そんなバカじゃないし、今までの描写だとすごくバカみたいになってるけども、普通なんで、赤点とかとったことないし

「いいじゃん…今日おしまい。俺帰る」

「ちょっと、白石君！？」

一々追いかけてくるな、もう一人にしてくれ…

「真琴は、全員で百点取りたいの、ダメ？」

「それお前の願望じゃない、義樹くんの願望だね」

振り返らずさっさと歩いた。

窓からは西日が射し始めて、窓ガラスをオレンジ色に染め、そこから通ってくる光も廊下をオレンジ色に染めた。

「ギクッ…ばれました？」

「どうせお前は義樹のことが好きなんだ。」

振り返ってびしっと相手を指差し言ってみた。

「はぅ…違いますよぉ…」

みるみる顔が赤くなっていってます。

分かりやすいなこの子…

「…いう…そう言う白石君にも好きな人いるんでしょう？」

「うっ…い…いない……いないに決まってる」

詰め寄ってくる真琴さん。

ここで“イエス”と答えてしまったら学校中に広まるに決まってる。

それはもう学習済みだ。

「白石君の反応おもしろ～い…」

ちょっと何か意味ありげにニッと微笑む。

本当に帰らせてくれ…追求され続けたらきっと“イエス”と口を滑らせてしまう。

その自信があります。

遊ばれてます…俺。

「面白いって何だ！？　おもちゃじゃないぞ？俺は」

「さっき私のこと遊びましたよね？　私が義樹のこと好きって…」

「遊んでない、事実を言っただけだ」

「っ…」

言葉を詰まらせる彼女…

「じゃぁ俺は帰る。お前は勉強でもしてな」

そう言ってその場から離れようとしたときだった。

彼女は俺のことを引き寄せ耳元でささやいた。

「義樹以上に好きな人がいるの…」

「だからなんだ、俺って言うなよ？　俺には関係ない話なんだから……っ！？」

「好きな人いないって言ったでしょ？　いるって正直に答えたらこんなことにはならなかったのに…どう？私のキスは甘かった？」

耳元でささやき続ける。

本当に真琴さんなのか？

「正直にって…」

「そう、いないのね？　今ならまだ間に合ってたのに…」

「はい？」

彼女は目をつぶり、また俺にキスをしようとしてきた。

「リュウちゃん？帰るなら一緒に…」

「んぅ…」

オレンジ色に染まる廊下。

俺は真琴さんにキスされつつも、一人の女の子の視線をちゃんと感じていた…

第十四話　悪魔《後編》（前書き）

夏美視点

第十四話　悪魔《後編》

七年前から大好きで、いつもそばにいて私を支えてくれていた人がいた。
最近再開してから、毎日がキラキラ輝きを増していった。
西日が傾き、オレンジ色に染まる廊下…
彼と会ってまだ間もないアノ子が…
あんなことをするなんて…

「…っ…あら？　石原さん？」

「あっ…夏美？…　これはだな…」

「なんでもないです。私ひとりで帰るので二人でどうぞ仲良く帰ってください」

すごく悲しかった。
一番いけないのは私。
いつまでもいつまでも臆病で、好きな人にきちんと好きって伝えなかったからこんなことになったんだ。
それを分かっていても、悲しい…

「ちょっ夏美！？」

「つっ…ついてきたらダメですよ…大事な人がリュウちゃん…じゃなかった白石君にはいるんですから…それと、私のことは夏美って呼ばずに、真琴さんのことを“真琴”って呼んであげてください」

「ごめんなさい…石原さん…あのね？龍が、好きな人いないって言

ってたからいいかなって…ダメでした？」
…始めて人を憎んだ。
生まれて初めてこんな感情が生まれた…
意味ありげに微笑む真琴さんが憎い…
こういう時…リュウちゃんに甘えていたいのに…
要君にだって甘えていたかった…
私が二人とも好きで欲張ってたから、神様がこんなことをしたんだ…
「いえ、大丈夫です。またあした」
「夏美、待てって」
「だからついてきちゃダメって…」
正直言うと、リュウちゃんが私を引き止めてくれて嬉しかった。
そのまま彼の手を振り払って、学校をでてしまった。
リュウちゃんはリュウちゃんで世界がある。
彼の世界が…
真琴さんは、私よりも先に告白をしたのだから、私が負けたんだ…
そう思っていたら後々涙が溢れた。
泣いたのなんて要君のとき以来…
涙はものすごくしょっぱかった。
こんな所で泣いていても変だから泣き止もうと思った…けどそう簡単には行かず、涙は止まらなかった。
「…なっちゃん？」
「うぐっ…ゆ…唯美さん…」

買い物帰りなのかレジ袋を両手に提げていた。

「私でよければ、話聞いてあげようか？」

唯美さんに近くの公園のブランコに座って相談にのってもらった。

「ふ～ん…リュウ君も意外とやるのね」

「…。」

「でもさぁ、なっちゃんを引き止めたってことはリュウ君にも理由がきちんとあるのよ、信じなきゃダメ」

「…リュウちゃんは信じたい…だけど、私より先に告白したのはアノ子だから…私は近づいちゃいけない。」

唯美さんは、ブランコの周りの柵の下にレジ袋において、ブランコをこいでいた。

私と唯美さん以外誰もいないし、だんだんあたりも暗く、静かになってきて、キー…　キー…と唯美さんがブランコを揺らす音だけがよく響いた。

「今からでも遅くないんじゃないかな？　もしリュウ君がその人の子と好きだったとしても…リュウ君は優しいから、なっちゃんの気持ちだって受け止めてくれると思うよ」

「…そうかな……」

私って自分を信じるのがすごく下手。
周りの人はいくらだって信じられる自身がある。
優奈にお人好しって言われるくらい…

「自信ない…」

「でも、もしかしたらリュウ君は、なっちゃんのことを好きかもしれない」

「そんなの…わかんないよ?」

「分からないから気持ちを伝えるの」

「…どういうこと?」

「相手の気持ちは分からない。だから気持ちを伝えなきゃいけないの」

唯美さんの言うとおりかもしれない。
もし、私がリュウちゃんの気持ちが分かったら、“好き”なんていう必要は無い。逆に、仮にリュウちゃんが私のことが好きでそのことを私が知ってたらリュウちゃんも私に伝えることなんて何も無い…

「なんかちょっと元気になった」

「そう、やっぱ笑顔な、なっちゃんのほうが可愛いよ」

プルルル…

「あ、ゴメン電話来たからでるね」

「あ、はい」

なんか背中がゾクッとなり、体中の血が一瞬だけ止まったような気がした。
嫌な予感がする…

「…はい分かりました」

そういって唯美さんは携帯を切って自分のジーンズのポケットに入れると、レジ袋をまた手に提げた。

「リュウ君が、事故にあったって…」

「え？」

唯美さんは悲しそうな表情をしつつも、落ち着いた口調だった。
嫌な予感が的中し、もっと背中のゾクゾク感が増した。

「病院にいるって、一緒に行こ？」

「…はい」

もう大切な人は失いたくない…
私からどんどん大切なものを奪っていかないで下さい…

第十五話　黒（前書き）

要視点

第十五話　黒

僕は目が覚めた。
何も無くて真っ暗…
手や足で周りに何があるのか探してみたが、鎖のようなチャリチャリとした音しか聞こえない。

「どこだ？　ここ…」

記憶もトラックにぶつかって、青い空がだんだん狭くなってゆくのを感じただけ。
しばらく座ってボーっと何も考えずにいた。
今がいつで、ココがどこで、僕は一体どういう状態なんだろう…
カッとスポットライトみたいのがついて、僕とエメラルドグリーン色の髪の少年が照らされた。
僕は、白いTシャツに、ジーパンという地味な服装をしていることに今気がついた。

「目が覚めましたか？私（わたくし）の名前は…Ｆ５１０」

「はい？…どう聞いても人間の名前ではなさそうですけども…？」

「えぇ人間ではないです。おっとこれ以上は秘密」

彼は人差し指を口に当てウィンクをした。
そして僕の胸に手を当てると

「君は確か…佐藤要くんだね？」

「そうですけど？」
彼は背が低く、小学生くらいの雰囲気。
だが、口調などはとても落ち着いていて、内面は小学生じゃないのかもしれない…
「さてと、本題ですが…あなたはずっと片想いをしているようで？」
「……なんで君に言わなくちゃいけないんだ？」
「私は色々な人々の夢を管理するものですから」
彼曰く、職業は“夢管理人（ドリームマスター）”をしているらしい…
どんなことをしてるんだか詳しくは分からないけど。
「…片想いなのはもう調査済みなのです。嘘はつけないのです。」
「じゃぁ僕を両思いにさせようということ？」
「そういうことです」
ちょっと不満げに言うと優しく微笑み頷いた。
「…賠償とか必要？」
「もちろんです。何が賠償かは企業秘密ですけどね」
「…考えておくよ」
「じゃぁ期限は一週間ということで」

少年は、上着の胸ポケットから手帳を出してその手帳と一緒にくっついていたボールペンで何かメモを取ると、スポットライトが消え、少年もどこかへ消えてしまった。
僕は“夢管理人（ドリームマスター）”に興味があった。
確かに夢、というほどでもないが、夏美が彼女だったら嬉しいのは事実だ。
賠償が何で、あの少年がどう動くのか、楽しみだった。

僕は一週間を真っ暗闇で過ごした。
何も無くてとても退屈だったからずっと寝転んでいた。
考えていたことといえば、夏美とか龍とか姉ちゃんがどうしてるかな…とかＦ５１０のことかとか、今自分はどこにいるのかとかいろいろ考えたけど、答えは見つからなかった。
最後の二日間は暇すぎて寝て過ごした。
目が覚めるでずっと眠っていて、それからは眠くならなかったけど最後の二日間は眠くて仕方が無かった。
またカッとスポットライトがつき、Ｆ５１０が現れた。

「おはようございます。さてどうしますか？」

「……同意することに決めました」

「何があっても保障はしません。本当によろしいですか。」

僕は、「はい」とも「いいえ」とも答えず黙って頷いた。
するとＦ５１０も何も言わず、分厚い扉へと導いた。

「この扉をくぐると、もうココには戻って来れません。」

「はい」

鎖がチャリチャリと音を立てた。
きっと彼が取ってくれているのだろう。
この扉を抜けると何が待っているのだろう…
ドキドキと高まる鼓動…
高ぶるわくわく感…
そして不安…

「いってらっしゃい」

僕は扉を開けた。
しかし、何もなくただ青い空が延々と続いていて…
気づくと僕は、日本でも大きな都市、東京の空から真っ逆さまに落ちていった。

「またいつか会いましょう、佐藤要さん。…いえ、たった今から白石龍さんでしたか…」

Ｆ５１０は扉を閉めた。

第十六話　大好きな人（前書き）

龍視点

第十六話　大好きな人

大好きな人を傷つけてしまった。
俺のせいだ。
夏美にきちんと気持ちを伝えておかなかったからこういうことが起きたのだ。
今更後悔しても遅い…
もう少し前まで時間を戻せたら…
徐々に空が暗くなり始め、夜の冷たく静かな空気…
夏美はちゃんと家に帰っただろうか？
もし夏美に何かあったら…
俺の責任だ。
すべて俺が悪いんだ。
もし要みたいに事故にあってしまったら…
そんな心配がどんどん俺の心をめちゃくちゃにしていく。
まるでレモンを絞ったような感じで…
つぶれて気持ちが溢れていく…

まず、携帯に電話をしてみた…が電話に出る気配が無い。
いつもはスグに出てくれるのに…
やっぱり何かあったのでは！？

次に夏美の家を訪ねてみた。
住宅街の中にあり、レンガ造りの家の表札に「石原」と刻まれていた。
インターホンを鳴らすと、夏美の家は特にお金持ちいうわけでもないのだが普通の人よりちょっとお嬢様なので家政婦のおばさんがでてきた。

「…夏美さんはまだ帰っていませんよ？」

「あぁ…そうですか…」

そういって夏美の家から出たときはもう七時近かった。
もう夜という時間帯に入り始めているというのに…

学校にも戻ったし、色々思い当たる場所に行った。
けれど夏美は見つからない。
探しても探しても見つからなくて、一つだけぽつんと
街灯に照らされた自動販売機を見つけた。
のどが渇いていたのでペットボトルの水を一本買った。
すると体の隅から隅までひんやりとした水が行き渡った。

キャップを閉めて、しばらく自動販売機に寄りかかり休んでいた。
休んでいるうちに変な感情にとらわれた。

いくらこの町の隅から隅まで探しても、この日本の隅から隅まで探
しても、この世界中を、宇宙の中を探しても、夏美はいないんじゃ
ないかって気がしてきた。
つい何時間か前まではいつもと同じときが流れていた。
なんか途中からほかの時が流れている気がする…
何かが違うのだ。
いつもと…
気のせいなのかもしれないし、きっとこのことは俺しか気づいてい
ない。
逆に、この流れを気づかせないために俺と夏美を引き離したのでは
？とかそういうことばっかり。
なんか気味が悪い。
そんなことがあるはずが無い。運命なんて変わるとはいえ、他人が

すぐに変えられるものではないのだ。
そんな気持ちで心を支配しようと思った。

「何考えてんだか…」

自分で自分がおかしくなり、呆れた。
半分くらい残っていた水を一気に飲みきって、ゴミ箱に捨てた。
夏美にまた電話をかけてみた。
やっぱりでない。

ため息をつきながらも今度は自分の親が心配してしまうので一度家に帰ることにした。
いつもと変わらない長さ…二十四時間。
この単位で動いているはずなのに、いろいろなことがありすぎて長く感じた。
十年とちょっと生きてきて、こんなに長い二十四時間は初めてだ。

家に帰ってからまた電話でもしてみよう。
そんなことを考えいつもは二人で帰る通学路…一人で歩いていた。
早く仲直りしなきゃだな…

車どおりの少ない、細い路地に入った。
大通りの道もあるのだが、こちらのほうが早く帰れる。
この油断が大きな事故の原因になるとは…

住宅街の道は、近道の割には複雑になっていて、一本でも道を間違えると全然違う場所に来てしまう。
方向音痴の子が来たものなら、迷子決定。
たくさんの道がつながっているため、交差点のような感じで交わる道路もたくさんあった。

俺はまっすぐ歩いていた。
しかし、右方向からは、道ぎりぎりくらい大きいトラックがやってきていた。
ライトはつけず、運転も危なし気…
よけるほど俺とトラックには距離がなく、そのままトラックは俺に衝突してきた。

だんだん遠くなる意識の中。
俺はしっかりと見ていた。
運転していたのは大人ではなく、エメラルドグリーン色の髪の少年だった。

第十七話　白い鶴（前書き）

夏美視点

第十七話　白い鶴

私は眠っているリュウちゃんのベッドの隣の椅子に座り、ただぼーっとみんなが持ってきてくれたお花の入った花瓶を見ていた。
リュウちゃんは事故にあい頭を強く打ったので意識は無い。
なぜだか、悲しいという感情がありつつも、そんなに心配ではなかった。
神様が私を一人きりにしないと信じた。
私は毎日ココに来て、あせることも無くゆっくりとリュウちゃんが目を覚ますのを待っていた。
窓際なので、昼ごろの暖かな光が降り注いでいた。
なんとなくリュウちゃん名前を呼んでみた。

「…リュウちゃん…？」

名前を呼んでもリュウちゃんは眠ったままだった。

「リュウちゃん…リュウちゃ…」

何度も、何度も何度も…名前を呼んだ。けれどもおきてくれなかった。
そう思った瞬間晴れた空は急に曇り、雨が降り始めた。
病院には廊下だけ電気がつき、怪しい雰囲気になっていた。
カツカツ…
誰か歩いてくる。
いつの間にか外では雷も鳴っていた。
そして歩いてきた人はそんなに背は高くなく、私のほういてニヤッと笑った。

「はっ！？」

要君のときと同じ夢だった。
夢と同じ場所だったけれども、雨が降っていなければ雲ひとつ無い真っ青なが広がっているのが窓から見えた。
暖かい日差しが降り注いでいた。
今いる場所が夢に出てきたと思うと、怖くなってきた。
リュウちゃんはもうリュウちゃんじゃなくなってしまう気がした。
ココに眠っているのはリュウちゃんだけど、本当のリュウちゃんは、誰も知らない世界に行ってしまったような気分。
そう思って、ふとリュウちゃんの寝顔をみた。

「…―あれ？」

リュウちゃんではなく、要君が眠っていた。
まだ幻覚みたいなのが見えているのだと思い、目をこすってもう一度見た。
やっぱりリュウちゃんだった。
またボーっと花を眺めていた。
ピッ　ピッ　と心拍数を表す機会の音だけが耳に入ってきた。
さっきまでは包帯とかハサミとかが乗ったワゴンを運ぶ　カチャカチャした音とか、看護師さんが小走りするパタ　パタという音がしていたのに、機械の音だけに包まれた。

その音に包まれていると、自然に目がその機会に向いてしまう。
折れ線グラフみたいな線が画面を流れていった。
たくさん数字が書いてあって、私にはさっぱり分からなかった。
ただこの機械について知っていることは、ドラマとかで見たように、折れ線グラフがただの直線になって、一番大きく書かれている数字

がゼロになって、ピー　という音になったら、もうその人は大抵死んでしまうということ。

ほかにも三台くらい機会があったけど、これらの機会の知識は全く無い。

無意識のうちに、リュウちゃんが目を覚ましたら何を話そうか迷った。

喧嘩中にこんなことになってしまったから、気まずいんじゃないか？って思う。

「なっちゃん？」

「あ、こんにちは…」

「もう、二回も呼んだのに気づかないんだから」

「あれ？　そうでした？」

唯美さんはニッコリ微笑むと、もう一つの椅子を私の隣へ持ってきて座った。

私と要くんとリュウちゃんは昔から仲がいい幼馴染で、小学生のときは唯美さんも一緒に遊んだりもしていたので、唯美さんもお見舞いに来てくれた。

「あのお花綺麗ね…だれがもってきたの？」

「クラスメイトだったり先生だったり…色々な人が持ってくるので分からなくなっちゃいました」

「そう…」

そういって唯美さんは立ち上がり、千羽鶴に触れた。
虹色になるように出来ているので一番上は赤で、一番下のほうは紫いろの鶴がつながっていた。
よくみると唯美さんは一羽一羽鶴を数えていた。

「…鶴数えているんですか？」

「うん。しかも計算とかじゃ嫌なの、絶対千羽ぴったりだって数えたいの」

「そういうところ、唯美さんらしいです」

唯美さんが一つ一つ数えていると、外側から見ただけじゃ分からないくらい中側に真っ白い鶴を見つけた。
不思議に思い私も椅子から立ち上がった。

「真っ白い鶴…」

「あ、本当だ…もしかしてラブレターだったりとか？　ちなみにこれで千一羽目よ」

数えるのがものすごく早い。
おそらく唯美さんのことだから、たくさんものがあると必ず数えていたのかもしれない。

「…勝手に鶴とっちゃダメかな？」

「いいんじゃない？　これで千羽になるんだし」

唯美さんは鶴をつなぐ糸を器用に指で切って、白い鶴だけ取ると鶴がばらばらにならないように、切った糸を結んだ。
白い鶴を破らないようにそっと開いた。
そこには新聞などを切り取った文字で、『お幸せに』とだけ書いてあった。

「…何これ？」

「誰から来たんでしょうか…」

裏を見ると、パソコンで打った文字で「Ｆ５１０」と書かれていた。

「えふ…ごーいちぜろ？」

「なっちゃん変なの　で、こんな人知らないわよね？」

クスッと笑うと唯美さんは鶴を丁寧にまた鶴の形に折りなおして、千羽鶴のしたにおいた。
するといままで折れ線グラフが流れていた画面の線は、ただの直線になり　ピー　という音が流れ、数字もゼロになった。

「…嘘でしょ…？」

私と唯美さんは黙ってその場立っていた。
すると画面が直線しか流れていなかったのに、折れ線グラフに戻り、音も　ピッ　ピッとなった。

「…あれ？」

私たちは顔を見合わせた。

「―っ…」

「リュウちゃん?!」

「リュウ君?!」

リュウちゃんが目を覚ました。

第十八話　操り人形（前書き）

夏美視点

第十八話　操り人形

「―っ…」

「リュウちゃん?!」

「リュウ君?!」

リュウちゃんが目を覚ました。

「ってぇ…　あれ?　ココ病院?」

「…そうだよ」

思わず涙が溢れてくる。
ココで泣くなんて変なのに、リュウちゃんの手を握り締めながら涙が止まらない。

「泣くなって」

そういって私の涙を拭ってくれるリュウちゃんの優しさで、余計に涙が止まらない。
リュウちゃんを信じてあげられたら、きっとこんな事故にあうことは無かったのに…

「…めんなさい…ごめんなさい」

「謝ることじゃないよ、な?」

唯美さんを見上げると、唯美さんはいつもと変わらない笑顔で、
「そうよ、なっちゃんも悪いけどなっちゃんだけのせいじゃないよ、リュウ君の“不注意”だよ」
「…ってほとんど俺のせいじゃねぇか！？」
「うるさいわねぇ　なっちゃんは謝ったんだからリュウ君も謝るのが普通でしょ？」
唯美さんってもしかしてS？
同じ女子からみても微笑んでるのに怖いよぉ…
「夏美、ごめんな」
「ううん、」
「はい、これで仲直りね」
リュウちゃんが、私をなでてくれた。
くすぐったくて無意識のうちに笑顔になる。
でも…なんかいつものリュウちゃんと違う気がしてしまう。
いつものリュウちゃんの笑顔で、いつものリュウちゃんの手で、いつものリュウちゃんの温もりなのに、なんか違う気がしてしまう。
「ん？　どうかした？」
「…ううん、なんでもないよ」
作り笑顔でごまかしてしまう。

これは私の悪い癖。
本当は言いたいことがあるのに、作り笑顔で奥へ奥へと心の中に埋めてしまう。
今だってそう、リュウちゃんに好きって言わないで、奥に埋めてしまっている。

「あ、そうそうリュウ君さぁ、これに心当たり無いかしら？」

唯美さんは、さっきの白い鶴を一回見せてから敗れないようにそっと一枚の紙に戻した。
やっぱり『お幸せに』と、『Ｆ５１０』の文字しか書かれていなかった。

「…それは―」

ちょっとリュウちゃんの表情が曇った気がした。
それには気づかない素振りで唯美さんは、あせる様子も無く、リュウちゃんが答えるのを待つ。

「ん？」

「っ…ぁああ」

「リュウちゃん！？」

リュウちゃんが頭を抑えて叫んだ。
頭痛…？

「大丈夫！？」

いままで平常心を保っていた唯美さんが、ちょっとあせり始めた。
「看護師さん呼ぼうか？」
「いや…いい…っ」
だんだん痛みがひいたのか、苦しみつつも最初よりは平気そうだった。
数分経ってからリュウちゃんはつぶやいた。
「この鶴…もう見せないでくれ」
「…うん、わかった」
私は鶴を、鶴の形に折りなおして鞄に入れた。
唯美さんもほっとした様子で、
「じゃぁ私は先帰るね」
と帰ってしまった。
「明日からまた学校だね」
私たちの学校は、土日は休みで月～金の平日が学校のある日で、今日は日曜日。
「あぁ」
リュウちゃんは窓の外を眺めながら、どうでもよさそうに返事をした。

「…リュウちゃん…あのね」

「ん？」

思っても無い言葉だった。
リュウちゃんに返事をされてから気がついた。
それからなのか、だんだん心臓がドキドキと速くなっていく…

「好き」

確かに、私の気持ちだった。
けれど自分から意図的に言おうと思っていたことではなかった。
誰かに操られているみたいな…
そしてこの一言だけ、部屋でずっと響いている感じがした。

第十九話　春

自分の中に、俺以外の誰かがいる。
そんな感覚を感じながら、唯美さんに一枚の紙を見せてもらった。
紙には、『お幸せに』と、『Ｆ５１０』この七文字だけなのに頭に激痛が走る。
何もかもが謎だった。
頭痛が頻繁に起きるタイプではないし、風邪をひいているわけでもない。
事故のことが残っているとしても、痛みが違う。
頭を強く打ったのなら、中のほうからジンジンと来るはずの痛みが紐で締め付けられたような痛みだった。
多くの謎を抱えたまま、彼女の告白を受け入れた。

「…リュウちゃん…あのね」

「ん？」

「好き」

思っても無い言葉だった。
だんだん心臓の音が早くなっていった。
最初は、窓の外を見ていた。
夏美を振り返ると、

「おい」

足を組んでえらそうな態度をとった夏美がいた。

「うぇ？　夏美？」

「は？」

夏美は呆れてため息をつき、千羽鶴の下においてあった白い鶴を広げた。

そして、夏美は振り返った…けれど、唯美さんと同じ顔つきをしていた。

「ほら、これ見てみ？」

そういって唯美さん（夏美？）は俺の寝ているベッドに乗っかり、顔ぎりぎりまで鶴のメッセージが書いてあるほうを見せてくる。

だんだん頭に激痛が走る。

「うぁわあああああ」

はっとして目を開けると、姉ちゃんが僕の上に馬乗りになって頭を締め付けていた。

「うわっ！？　ね…姉ちゃん！？」

「全く…要は寝起きが悪いんだから…」

「って…なんで僕の上に乗ってるわけ？」

「うぁ…ごめんなさい」

ちょっとあせった感じで姉ちゃんは僕の上から降りる。
僕も起き上がると、

「ずっとうなされてたわよ？　寝言は言ってなかったみたいだけど…」

「そう…」

まだ起きたばかりで思い体を引きずりながら階段を下りていると

「リュウ君もなっちゃんも早くしないと来ちゃうわよ？」

いじわるそうに姉ちゃんは微笑んだ。
「わかったよ」とめんどくさかったので適当に返事をしておいた。
いくらＳとはいえすごくいじわるというわけではないから。
朝食のパンを食べているとふと思い出した。
あの“Ｆ５１０”というのはどこかで見覚えがあった。
名前自体は見たことが無かったがあの髪色は見たことがあるきがした。
そんなことを考えていると、制服姿の姉ちゃんがやってきた。
鞄にはＦ５１０のストラップがついていた。
思わず驚いたので姉ちゃんに問いかけてみた。

「何それ？」

「なっちゃんにもらった」
姉ちゃんはイラついたような言い方だった。
いつものことなので慣れっこだけど。
「それより、要はもう中二なんだからしっかりしなさいよ！？　いつまでも後輩気分でいたらダメよ？」
「はいはい…」
全部適当に受け流す。

姉ちゃんが家をでてから、朝の支度を始めた。
歯磨きをしていたら洗面所の鏡には、僕の顔が映った。
なんで龍の気持ちになった夢を見たのか、すごく不思議だった。
着替えも半分終わったとき
ピンポーン
「いっ…もう来たの！？」
あせってワイシャツのボタンをつけ間違えてしまう。
何とか着替え終わり外にでようと鞄の準備をした。
「要〜？　早く〜」
ドアの向こうから声がした。
「わかった、いま行くよ」

そういって僕は外に出た。
春らしく暖かい太陽の日差しだった。
近くの木上に気配を感じ振り返った。
エメラルドグリーン色の猫がいた。
目が合って、しばらく時間が止まっていた気がした。

「…要君？」

振り返るときょとんと首をかしげたかわいらしい少女がいた。

「ううん、なんでもない」

僕は微笑むと、三人で歩き始めた。

後から思うと、Ｆ５１０は本当に、夢管理人（ドリームマスター）なのかもしれない。
それは“将来”の夢じゃなくて、“眠っている間”の夢のことなのだと時々思うことがある。
いまも、木の上から僕たちのことを見守ってくれているのかもしれない。

【ＥＮＤ】

第十九話　春（後書き）

いままでご愛読ありがとうございました。
柱をたてて丁寧に書いたつもりなのですが、色々寄り道をし、道に迷い…
そんな感じでちゃんとしたゴールにたどり着くことが出来ました。
その寄り道と、今までの最高ポイントを記念して、このシリーズものを続けたいと思います。
内容は、まだこの三人は誰とも結ばれていないので…
今回よりも恋愛っぽいものに仕上がると思います。
本当に今までありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1510s/

あの日、あの時、あの夏は、まだ止まったままで・・・

2011年4月26日08時42分発行